

「囲碁史書出版」事業

囲碁の歴史が手に取るように見えてくる。
日本初の囲碁史書が完成した。

囲碁の起源はとても古く、日本には奈良時代に伝わったといわれ、数多くの文献に囲碁という文字が登場する。しかし、それらをまとめたものはこれまでになかった。日本棋院の囲碁史会はこれらの資料を上下二冊の文献にまとめ「囲碁史書」として後世に残すことにした。

奈良時代から江戸時代までの
囲碁にまつわる資料をまとめる。

清少納言や紫式部も碁をよく打ったとされ、枕草子や源氏物語の中にも囲碁が登場する。それどころか、「碁」という文字は古事記にも登場するというから驚く。他にも無数の文書や物語、韻文に碁が表されているが、「碁」を軸に1つにまとめられたものではなく、研究家たちは、あっちこちの文献から一つ一つ調べなければならなかったのだ。

そこで囲碁史会のメンバーである増田忠彦さんは、古代から江戸時代までの膨大な文献から囲碁の記述を集めて1冊にまとめるという遠大な計画に取りかかることにした。

「最初は碁が強くなりたくて始めたのです。そのうちにいつか本にできればいいなという気持ちはありましたが」と増田さんは語る。増田さんは定年後、12年間という長い時間をかけて、図書館や大学に通い原典に当たった。

史書や古記録、日記、随筆、物語などの散文は1340書。和歌や、漢詩、狂歌などの韻文は数百点、連歌・俳諧は1,700句、雑俳にいたっては2,700句もの資料が集められ、整理されていった。

とはいえ、学術書である。そうそう売れるような書物ではない。なかなか出版のめどがたたなかったが、日本棋院の囲碁殿堂資料館の斉藤譲一さんに相談したところ、大阪商科大学アミューズメント産業研究所を発行元として出版する段取りがついた。AJOSCの助成も決まった。



12年間という長い時間をかけ完成した「囲碁語園」

ようやく完成した本は「囲碁語園」と題し、上下二巻、上巻は946ページ、下巻は873ページという大部なものになった。上巻は本編で時系列的に碁についてが編述され、下巻は補編として、上巻に載せられなかったものを拾遺的に集め、文芸ジャンルごとに記述されている。さらに巻末には「事項・人名索引」「引用書索引」のほか、「囲碁史研究文献目録」が掲載されている。研究資料としての使い勝手を考えた配慮だ。

囲碁が原因で刃傷沙汰に？

読み物としても一級品の内容になっている。

「囲碁語園」を眺めて思うことは、まず増田さんの苦労が偲ばれるということだ。さすがに囲碁を愛する編者である。傍目には囲碁の話とはわからないものもきちんと拾われている。室町時代には碁打ちが武家や公家に招かれるほどのいわゆるプロも現れており、囲碁は一般的な遊びというより素養だった。ある日記には「囲碁が元でケンカが起きた」などと書かれている。時には刃傷沙汰にまで発展したようだ。熱くなるのは昔も今も変わらないことがわかる。

戦国武将たち、ことに徳川家康が大の囲碁好きであっ



「囲碁語園」の草稿



東京市ヶ谷の日本棋院にある「囲碁殿堂資料館」



天保時代初期の囲碁番付

たことは有名である。人名索引にはその他にも豊臣秀吉や上杉謙信、前田利家など歴史上の有名人物がずらり

担当者より



助成いただいたおかげで
本を完成することができ
ました。

囲碁史会 会員
増田忠彦さん

当初ひとりでコツコツと進めていたものが、出版のめどが立ってからは草稿を読んでいただいた皆様のご協力を得て、修正作業を進めることができ本当に勇気づけられました。またAJOSCの助成なしには完成しなかった書物です。この場をお借りして御礼申し上げます。

と並ぶ。

「囲碁語園」は読み物としても面白く、歴史書としても興味深い書物になっている。もちろん研究資料としては一級品だろう。

前述の囲碁殿堂資料館の斉藤譲一さんは「今まで囲碁の歴史に関するお問い合わせをいただくたびに、文献に当たらなくてはなりませんでした。これからはこの本をご紹介するだけで済みます」と語る。

長年の念願がかなった増田さんも感慨深げに述懐する。

「さまざまな文献に目を通しながら、囲碁の奥深さをあらためて知った思いがします。収集にあたっては素人なりに手当たり次第に囲碁という文字を検索してきました。今後この本を利用して研究家が増え、また研究成果があがることを期待しています」

「囲碁語園」は図書館や大学などに配布される予定だ。店頭販売していないが、誰でも買い求めることができる。上下巻あわせて5000円。内容からいってもけっして高くないだろう。囲碁に興味のある方はご一読されることをお勧めする。本書に関するお問い合わせは、以下の通り。

大阪商科大学アミューズメント産業研究所

TEL: 06-6618-4068